



『冥界法』によると、「不死の秘法」を受ける者は「石棺に入る」と記してあったが、実際には「周囲に石棺が形成されていく」ようだ。クレオパトラ・ヌヴィアと緑色のヘビは交わったまま徐々に見えにくくなっている。やがて石棺となり鳥頭達にどこかへ運ばれて保存されるのだろう。何とか鳥頭の一匹、ヘビ又は液体或いは彼女を研究室に持ち帰りたいが、状況を考えると本格的調査隊を要請できる証拠サンプルの入手が精一杯だろうか。何よりも、この地域そしてガヘル共和国から無事に脱出せねばならない。クレオパトラの石棺が運ばれると予想されるピラミッド（なぜか岩が金色に輝いて見える）に先回りし、何か手を打ったほうが良さそうだ。それにしても衛星通信の時代にこれほど非科学的な事態に直面するとは・・・

TO BE CONTINUE

[illegible]

WILD WET QUEST

2005901

[illegible]

SAFARI
MASSACHUSETTS



クレオパトラ・ヌヴィアは樹皮のような古布で巻かれ、緑色に輝くヘビを咽喉深くに銜え込んだまま祭壇の上で何とかが立っていた。ヘビを吐き出そうとすると鳥頭達が慌てて制止する上、動くヘビがキハを立てそうなのでうかつに動けない。口の中のヘビがどこからか分泌している大量の液体も吐き出したいが、やむをえず飲み込んでいる。この液体は毒のような感覚があり、麻薬や幻覚性アルカロイドの一種なのか、やがて意識が異常な鮮明さを持って現実と非現実の境界をさまよい、内臓のあたりを激しく痙攣し始めた。甘美な刺激に支配されて身体をよじりながら、第二、第三のヘビが別の入り口を求めて這い上がって来るのに応じ、彼女は腰を落とし気味にしてそれらを受け入れる体勢だ。ファラはクレオパトラ・ヌヴィアの全身の粘膜からヘビの分泌液体が浸透し、然るべき期間秘薬で満たされた石棺に入って「不死の秘法」を完成させる前に、鳥頭達と戦えるよう自分の武器に古代の儀式を施さねばならない。通常の武器だとガベル共和国の強力な兵器であっても効果は期待できないが、「不死の秘法」を行うものは人間であろうか鳥頭であろうか「時空の神」や「冥界の神」に大刀打ちできない客だ。ファラは祭壇を離れて「まさか実践する事になるとは夢にも思わずに」習い覚えた古代の儀式を行う場所を探し始めた。銃弾やナイフ、短やジャベル、眼鏡に到るまで持っているものは全て儀式の対象だ。非科学的アイテムの準備が出来次第クレオパトラ・ヌヴィアを殺して鳥頭達と戦うか、「不死の秘法」が危険かどうか彼女で確認してから戦うか。選択肢はあまり無さそうだ。

W/440 9W44 Q44S4

GALGREASE 004

544404W
4454444444

SHIROW MASAMUNE



20030127

12:18

W4L5 W4L5 Q4L5